

総合型選抜入試合格者を対象とする入学前ライティング教育の試み

○佐藤勢紀子¹，駒形一路¹

¹ 東北大学

1. はじめに

大学で必要とされるレポートや論文を書く力を養うために、一年次学生を対象とした日本語ライティング教育がさかんに行われている。一方、近年大学における年内入試の導入が進み、早期に合格が決まる受験者の数が増加しつつある。東北大学では、2022年度に、年内に合格が決まる総合型選抜入試の合格者を対象とする入学前ライティング準備教育（以下、入学前ライティング教育）のコースを設け、入学後のレポート作成の土台を築くためのライティング指導を開始した^{注1}。本稿では、2024年度に実施した入学前ライティング教育を中心に、その概要と受講者の反応について報告する。

2. 入学前ライティング教育の担当者と対象者

2.1 担当者

入学前ライティング教育の担当者は稿者の佐藤と駒形である。佐藤は1988年から東北大学において留学生を対象とする日本語教育に従事し、その中で分野横断的な日本語論文作成指導に関する教育・研究を行ってきた（佐藤他2013）。駒形は1987年から静岡県内の高等学校で国語教育に携わってきた経歴を持ち、現在は東北大学に勤務している。

2.2 対象者

今回報告する入学前ライティング教育の対象は、東北大学の総合型選抜の入試——AO入試Ⅱ期の合格者である。この入試は同大学の10学部のうち経済学部と薬学部を除く8学部で実施されている。2025年度に向けての募集人員は計288名、合格者数は計292名であった。2024年度入学前ライティング教育の受講者はこのうち87名であった（表1）^{注2}。なお、2025年度の東北大学の入学者総数は2499名であった。

2025年度AO入試Ⅱ期の日程は、第一次選考試験が2024年11月2日、第二次選考試験が11月16日、合格者発表が11月22日であった。例年この入試の合格

者は合格してから入学までに4ヶ月以上の期間があり、学部によってはその期間を利用して独自の入学前教育が行われている。

表1 入学前ライティング教育受講状況(2024年度)

	AOⅡ期 合格者	入学前ラ イティ ング教育 受講者	受講率 (%)
文学部	27	13	48.1
教育学部	14	6	42.9
法学部	24	7	29.1
理学部	40	6	15.0
医学部（医学科）	18	3	16.7
医学部（保健学科）	22	16	72.7
歯学部	6	6	100.0
工学部	118	7	5.9
農学部	23	23	100.0
計	292	87	29.8

3. 入学前ライティング教育の概要

3.1 方針

高校までの作文、小論文等と大学でのレポートの違いを認識させ、研究倫理の基本を教示し、初年次学生必修の「学問論」におけるライティング学習の準備段階の指導を行う。ライティングについての意識を変えること、大学でのライティング学習がなぜ必要なのかを理解すること、入学後のライティング学習へのモチベーションを高めることに重点を置く。

3.2 コース

入学前ライティング教育の実施にあたり、2つのコースを設置している。入学前ライティング演習（Aコース）と入学前ライティング演習（Bコース）である。Aコースの受講者は教材を用いて学習し、確認テスト

を受ける。Bコースの受講者は教材学習・確認テスト受験のほかに課題作文を提出し、添削を受ける。2024年度の受講者は、Aコース36名、Bコース51名であった。

3.3 日程

2024年度の日程は以下のとおりである。

- 12月前半 各学部のオリエンテーションで入学前ライティング演習について周知
- 12月20日 受講申し込み期限
- 1月24日 教材配信、学習開始
- 1月31日 課題作文出題（Bコースのみ）
- 2月28日 確認テスト・課題作文提出期限
- 3月19日 課題作文の講評および添削結果送付（Bコースのみ）

学習開始のタイミングについては、AO入試Ⅱ期の合格者も大学入学共通テストを受けるケースが多いことから、その終了後としている。

3.4 実施方法

コース別の Google Classroom を作成して受講者に登録してもらう。基本的にこれを通じて連絡、質問等の受け付け、教材の配信、添削等の作業を行なう。

確認テストについては、Google フォームで学習教材の内容に関する20問の問題を出題し、回答後に受験者に採点結果（自動採点、20点満点）と解説が届くように設定している。回答に際しては各自のメールアドレスを記入させる。点数が17点以下の場合は、18点以上になるまで再受験するよう指示している。

Bコースの課題作文については、特定のテーマに関する複数の文献から抜粋した文章および図／表を提示し、文章を適宜引用し、図／表のデータを用いて800字程度の文章を書くことを求めている。大学におけるライティングで重点的に扱うべき項目として引用の形式が挙げられている（近藤 2021:93-96）ことから、このような形で出題している。2024年度の課題作文については、次章で詳述する。

3.5 教材

A・Bコース共通の学習教材として、『東北大学レポート指南書 第5版』（串本他 2024）とその別冊（佐藤 2024）を使用している。また、補助教材として、『東北

大学レポート指南書』とほぼ同内容の動画教材「レポート作成入門ゼミ」（東北大学学習支援センター制作）5編も配信している。

3.6 検証

学習効果を検証し、指導方法を改善する目的で、受講者の感想や意見を求める2回のアンケートを実施している。1回目は3月のコース終了直後に行い、2回目は受講者が入学後実際にレポートを書く経験をした後、8月の時点で行う。2024年度第1回アンケートの質問項目と結果については、本稿の第5章で紹介する。

4. 課題作文—2024年度の実施例—

4.1 課題

Bコースの受講者に対し、1月末に課題作文を出題した。書き方について、文献リストを除いて800字程度の字数で書くこと、今回書く文章は「レポート」ではなくその一部に当たるものであることを伝えた上で、以下のガイドラインを示した。

- 1) 題目を付ける。
- 2) 資料Aの5つの文献の中から3つ以上を選び、必要な部分を引用しつつ論述する。直接引用でも間接引用でもよい。引用の際には「資料A」「文献1」「文献2」などの語は使用しないこと。
- 3) 資料Bの2つの図の中から1つ以上を選び、図からわかることを論述の中で示す。その際、「資料B」という語は使用しないこと。
- 4) 本文の後に、参考文献という見出しをつけて、自分が引用した資料Aの文献の情報を書く。注記式文献目録方式とリスト参照方式のどちらかを用い、本文中での文献の示し方と合わせて適切な形で書くこと。（→『東北大学レポート指南書』pp.24-27）
- 5) 必要に応じて、資料Cの「レポートや論文でよく使われる表現」を利用して書くこと。
- 6) 資料Aの文献以外の文献から引用してもよいが、その際にはその文献の情報を参考文献として書くこと。

4.2 提出方法

課題作文の解答用フォーム（PDF形式およびWord

形式)を用意し、このフォームを用いて Google Classroom を通じて提出するように指示した。資料Bの図をフォームにコピーする必要はないことも伝えた。

4.3 資料

課題作文の資料として実際に使用した文章や図は紙幅の関係で掲載できないが、文献情報を記載する。

資料A(文献)としては、以下の5つの文献から一部を抜粋して提示した。図書や雑誌の奥書の形式で、文献情報も合わせて示した。

文献1(図書):金田一春彦(1988)『日本語 新版(下)』岩波書店

文献2(図書):ネトル,ダニエル・ロメイン,スザンヌ,島村宣男訳(2001)『消えゆく言語たち—失われることば,失われる世界—』新曜社

文献3(図書):水村美苗(2008)『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で—』筑摩書房

文献4(講演録):宮島達夫(2014)「世界の言語と日本語の将来」『ことばと文字』1,56-68

文献5(Webサイト上の文書):文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編」

資料B(図/表)としては、次の2つの図を提示した。併記したWebサイト上のデータをもとに作図したものである。受講者には、これらの図を自身で作図したものとして課題作文を書くように指示した。

図1:世界の言語の使用者数

<https://www.ethnologue.com/insights/ethnologue200/>

図2:インターネットにおける使用言語の比率

https://w3techs.com/technologies/overview/content_language

資料C(表現例)としては、二通他(2009)から、この課題作文で使用するのに適当と思われる表現を選び、提示した。「問いを立てて考察を進める」、「引用する」、「図表を提示する」、「判明事項を述べる」、「根拠に基づいて判断や主張を述べる」の5項目を立ててそれぞれ複数の例を挙げた。

4.4 提出された作文の概況

Bコースの受講者51名全員が課題作文を提出した。文献引用については3つの文献を引用した作文が最も多く33編であり、4つが10編、5つが6編であった。

資料の文献以外に独自に文献を探して引用した作文も10編見られた。引用の方式としては注記式文献目録方式を用いた作文が21編、リスト参照方式を用いた作文が30編であった。引用の形式は総計で直接引用が65回、間接引用が117回用いられていた。また、図の使用については、図1が27編、図2が29編の作文で用いられていた。

4.5 講評と添削

前節の概況に加えて、全体として気になる点を取り上げて7ページにわたる講評を作成し、受講者に送った。講評の項目は、1)概況、2)題目の付け方、3)論の方向性、4)引用、5)表現、6)形式上の注意点である。

また、Google Classroom のコメント機能および通信機能を利用して、各自の作文に添削コメント(平均9個)を入れるとともに、特に評価できる点や改善してほしい点を記した寸評を送った。

5. 受講者の反応—2024年度のアンケートより—

コース終了直後に行った第1回アンケートでは、教材の有用性、確認テストの問題数、難易度、有用性、高校と大学のライティングの違いについての資料^{注3}の有用性、演習全体の満足度などについて選択式で質問するとともに、演習への感想や要望の記述を求めた。Bコースの受講者には、それらに加え、課題作文の字数、難易度、添削コメントと講評の有用性について選択式で質問し、課題作文へのコメントの記述を求めた。

これに対して、Aコース35名、Bコース50名からの回答を得た(回答率97%)。教材と確認テストの有用性については、「とても役に立った」「役に立った」「ある程度役に立った」という回答が合わせて99%に達した。課題作文の有用性については、「とてもよい練習になった」「よい練習になった」「ある程度よい練習になった」という回答が合わせて96%であった。

演習全体の満足度を図1に示す。「とてもよかったと思う」という回答が過半数を占めている。なお、これをコース別に見ると、Aコースでは「とてもよかったと思う」34%、「よかったと思う」52%、「ある程度よかったと思う」14%であるのに対し、Bコースではそれぞれ70%、22%、8%となっており、課題作文があるBコースの受講者の評価が特に高かった。これについては、2022年度から同様の傾向が見られる。

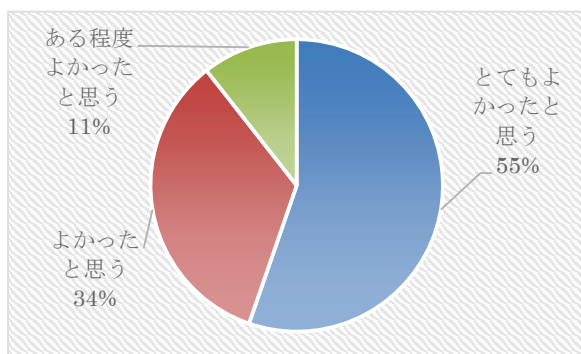


図1 演習を受講してよかったか（全体）

演習全体についての感想としては、次のようなコメントが見られた。括弧内はコースの記号である。

- ・大学と高校における文章の書き方の違いを入学前の段階で知ることができてよかったように感じています。受験が終わってから入学までの時期を有効に使うことができたように思います。(A)
- ・大学でのレポートの書き方を入学前に学ぶことができて、入学後の不安が少し解消されました。(A)
- ・高校ではずっと小論文の書き方を学んでいたため、客観的に論理を展開する方法を教わる経験を得ることができ、とても自身の糧となったと感じています。解説や添削も丁寧で分かりやすかったです。(B)
- ・入学前に大学での学習に向けて学ぶことで、よりこれからの学習が楽しみになりました。レポートの書き方について個別のコメントをいただける機会はなかなかないと思うので、今回学んだことをしっかりと心に刻み、入学後のライティングに活かします。(B)

一方、演習についての要望としては、内容がもう少し具体的な方が分かりやすい(A)、課題作文の出題時に書く内容についてももう少し詳しい説明がほしい(B)などのコメントがあった。

6. おわりに

以上、東北大学で年内に合格が決まる総合型選抜入試の合格者を対象に行っている入学前ライティング教育について、その概要と受講者の反応を報告した。年内入試は今後全国的に増えていくと見られるため、入学前ライティング教育の1つのモデルを提供できるように、さらに指導方法の改善に努めていきたい。

付記

本研究については、稿者らが2025年3月まで所属していた東北大学高度教養教育・学生支援機構による研究倫理審査を受審し、承認されている（審査番号：k00627）。

謝辞

本研究の一部はJSPS科研費JP21H04409の助成を受けたものである。

注

1. 2022年度には試行として2つの学部を対象に実施し、33名が受講した。2023年度からは年内に合格が決まる総合型選抜入試を実施しているすべての学部で入学前ライティング教育を採用している。
2. 薬学部と農学部では入学前ライティング教育を全員に課しているが、他学部では希望者のみである。
3. 毎年度第2回アンケートで高校と大学のライティングの違いを問い、それをまとめたものをコース終了時に資料として配布している。

引用文献

- 近藤裕子(2021)．学生はアカデミック・ライティングの何が難しいのか—大学初年次生のレディネス—，あらためて，ライティングの高大接続，ひつじ書房，87-99.
- 串本剛・佐藤智子・菅谷奈津恵・東北大学附属図書館学習支援実施部会・中川学(2024)．東北大学レポート指南書[第5版]．東北大学学務審議会，東北大学高度教養教育・学生支援機構．
<https://ital.ihe.tohoku.ac.jp/handbook/> (2025/8/17 閲覧)
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子(2009)．留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック．東京大学出版会．
- 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子(2013)．学術論文の構造型とその分布—人文科学・社会科学・工学270論文を対象に一，日本語教育，154，85-99.
- 佐藤智子(2024)．東北大学レポート指南書・別冊．東北大学高度教養教育・学生支援機構．
<https://ital.ihe.tohoku.ac.jp/handbook/> (2025/8/17 閲覧)